

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號一第 卷九第

行發日一月七年八正大

庭園都市に就いて……………法學博士 田島 錦治

支那投資の國際的共同……………法學博士 戸田 海市

住居税と公平負擔……………法學博士 神戶 正雄

社會政策より觀たる我國の財政……………法學博士 小川郷太郎

人糞尿の國益……………法學博士 財部 靜治

マルクスの唯物史觀に謂生産の意義……………法學博士 河上 肇

植民地の勞働政策……………法學博士 山本美越乃

ベンチーの組合社會主義論……………法學博士 河田 嗣郎

明治の米價調節……………法學士 本庄榮治郎

海運と國民經濟……………法學士 小島昌太郎

最近の出産率減少に就いて……………文學士 高田 保馬

# 經濟論叢

第九卷

第一號

(通卷四十九卷)

大正八年七月發行

## 庭園都市に就て

田島錦治

### 第一節 君民偕樂の庭園都市

「住めは都」とは誰知らぬ者なき我國の諺なり支那上古の詩に「邦畿千里、惟民所止」とあると恰も符節を合せたる如し此詩は詩經商頌玄鳥の篇中に在る句にて大學にも引かれ頗る人口に膾炙す朱註に「邦畿は王者の都」とありされは邦畿は邦語のミヤコに當る即ちミヤコは宮處の義にて帝王の宮殿の在る土地を謂ひ古歌に「大宮ところ」とあるは是なり

よろつよに見ともあかめやみよしの、たきつ河内の大宮ところ(萬葉六、題しらす)

みかの原ふたいの野へをきよみこそ大宮ところさためけらしも(萬葉六、題しらす)

邦畿は又帝都ともいふ古今遷建に「帝都天子之居、天子以四海爲家、豈有常處哉、惟其所  
在、即以爲都、故考古以來三皇五帝三代各有攸居、都者人之所都會云爾、以衆大而

言<sup>フツキヤ</sup> 謂<sup>フ</sup>「之<sup>ノ</sup>京都<sup>キョウト</sup>」とあり蓋し漢字の都は元アツメルの義を有すされは「水所聚也」(字彙補)「澤中有丘曰<sup>クニ</sup>都丘<sup>ト</sup>言<sup>フ</sup>蟲鳥所<sup>ニ</sup>都聚<sup>ト</sup>也」(釋名)などの註解ありこれより轉して人の聚まる所を意味するに至れる歟果して然らば漢字の都は元邦語のムラ(村、群居の義)と同義なるへし都の大なるを大都と稱し又京都とも京師ともいふ京は大を意味し師は衆を意味すされは京都も京師も共に大都會の事にて衆民の居住する所にして且帝王の宮城の在る所を指すに至れるなり  
夫れ村落か漸く進化して小都となり又大都となり且都會か常に國民文明の中心を成すは言語詩歌歴史の共に明證する所なり古歌に曰く

むかしこそなにはる中と謂れけめ今はみやこび都びにけり(萬葉三、式部卿字合のうた)

キナカは田居中の上略なりミヤコビは又ミヤビとつめヒナビ(鄙俗)の反對なる都風を意味し都雅風流文雅を意味するに至れり恰も拉丁語の都會又は市民を意味する Civitas より Civil, Civilization 等の語の出でたるに似たり又前中納言道房卿の家集夏の歌の中に

ほとゝきす青葉の山にかへるとも花のみやこをおもひわするな

嗚呼「花の都」何たる優雅なる語そや近年英米の書籍に雜誌に屢々 Garden Cities (庭園都市)なる語を見るも其卑俗や固より我の歌詞の比に非ず憶ふに上古に在りて君王か其都邑を奠むるや第一に外敵に對する防禦上最も適當の地點を下したるものゝ如く即ち山丘に據り江河に臨み天然の形

勢亦共に賞すへきものあり國の版圖漸く大に敵地漸く隔たるに至りては帝都は國の中心にして政令を四方に施こすに最も便なる地を選むに至れり而して斯くの如く選定せられたる都會は啻に天然形勝の地たるのみならず更に人工を加へて城闕を壯嚴にし街衢を端麗にし園囿を修飾す我古歌に

おほやまと、くにのみやこは、うちなひき、はるさりくれは、山へには、花さきをより、かは

せには、あゆこさはしる（萬葉三、中納言家持卿の歌）

やましるの、くにのみこは、はるされは、花咲をより、あきされは、もみちにほひ、（萬葉十七、境部宿禰老

丸のうた）

などあり嗚呼これ我古代の帝都か天然の形勝に據りて而かも人工の漸く加はれるは言外に之を味ふへし奈良の都か遂に平安の京に移りしは支那の周の都か豊鎬より洛邑に遷りしに等しく共に政令を布くに便なる地を選みたるなるへしされは史記周本紀に云く『成王在豊、使召公復營洛邑、如武王之意、周公復卜、申視、卒營築居九鼎焉、曰此天下之中、四方入貢道里均、作召誥洛誥』と

夫れ都會か王者の居處として先つ防禦に適する地に起り次に政令を布くに便なる地を選むに至り斯くして都會か文武兩政の中心となるや勢ひ各地交通の衝となり士民群集の區とならざるを得ず

是に於て乎都會の區畫及び街衢の制度は漸く發達し概して中央形勝の地に帝王の居城政府の廟堂は建設せられ各種の官廳之に接し百官の邸宅又之に次ぎて設けられたり而して此等は多くは城壁を以て圍繞せられ城壁外便宜の地に市場及び市民の住宅外客の驛亭等漸く成立するに至りたり蓋し古代の帝王か都市を營むや之を以て文化の中心となし萬民瞻仰の目的となさむと勉めたり而して或は專制君主か徒らに其宮殿を壯麗にし百姓の膏血を絞りて一身の奢侈に供したる如き場合に非すと雖聖明なる君主は豫め禮法を制定し尊卑の等級に従ひて衣服住宅の制を別にし冠婚葬祭の式を異にせしめ富貴も其等を踰えて奢るを得ず貧賤も亦自ら其分に安んずる所あり而して既に天然の形勝に據れる都會の風光は固より士民の俱に樂むる所而して聖主賢相か更に人力を加えて修飾し來りたる都會の美觀は亦必ずしも權貴の獨占にのみ歸せざりし例も亦多々ありとす前に掲げたる家持や境部宿禰の歌を咏まは我古代に於ける奈良の都や平安の京は春の花見又は秋の月見、河瀬の鮎漁り又は山邊の茸狩りに上下其樂を同ふしたるを想ひ見る可し

孟子に君民同樂の説あり曰く『孟子見梁惠王王立於沼上顧鴻雁麋鹿曰賢者亦樂此乎、孟子對曰、賢者而後樂此、不賢者、雖有此不樂也、詩云、經始靈臺、經之營之、庶民攻之、不日成之、經始勿丞、庶民子來、王在靈囿、麋鹿攸伏、麋鹿濯濯、白鳥鶴鶴、王在靈沼、於初魚躍、文王以民力爲臺爲沼而民歡樂之、謂其臺曰靈臺、謂其沼曰靈沼』

樂<sub>三</sub>其有<sub>二</sub>麋鹿魚鼈、古之人與<sub>一</sub>民偕樂故能樂也、湯誓曰、時日害喪、予及<sub>レ</sub>女偕亡、民欲<sub>二</sub>與<sub>レ</sub>之偕亡<sub>一</sub>雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>臺池鳥獸<sub>一</sub>豈能獨樂哉、(孟子梁惠王篇上) 孟子の説に依れば周の文王は靈臺靈沼と  
呼はれたる壯麗なる庭園を營作するに方り格別督促も爲さるに人民は自ら進み來りて工事に從  
ひ意外に早く竣成したり文王は斯の如く民力を以て庭園を作りたるに人民も之を歡ひ樂み王も亦  
之を樂む畢竟古の賢君は民と偕に樂むか故に能く樂むなり之に反して夏の桀王の如き暴君は人民  
を虐けて獨り樂まむとしたるか故に終に亡ひて獨り樂むことすら得ざりしなり孟子の本意蓋し斯  
の如し然るに後儒今を以て古を度り人民かまさか君主の庭園に於て君主と偕に遊樂する筈なし孟  
子の本文に『文王以<sub>二</sub>民力<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>臺爲<sub>レ</sub>沼而民歡<sub>二</sub>樂<sub>一</sub>之』とある歡樂は勸樂なり即ち人民か勸みて庭園  
營作の事に從ふを樂むなりと嗚呼斯の如き説は後世の專制政治の時代思潮に溺れて膠柱の誤に陷  
りたるものに外ならず請ふ試みに孟子の他の章を讀め曰く『齊宣王問、曰文王之囿方七十里、有<sub>レ</sub>  
諸、孟子對曰、於<sub>レ</sub>傳有<sub>レ</sub>之、曰若<sub>レ</sub>是其<sub>レ</sub>大乎、曰民猶以爲<sub>レ</sub>小也、曰寡人之囿、方四十里、民猶  
以爲<sub>レ</sub>大何也、曰文王之囿、七十里、芻蕘者往焉、雉免者往焉、與<sub>レ</sub>民同<sub>レ</sub>之、民以爲<sub>レ</sub>小、不<sub>レ</sub>亦宜<sub>二</sub>  
乎、臣始至<sub>二</sub>於境<sub>一</sub>問<sub>二</sub>國之大禁<sub>一</sub>然後敢入、臣聞郊<sub>レ</sub>闕之內、有<sub>二</sub>囿<sub>一</sub>方四十里、殺<sub>二</sub>其麋鹿<sub>一</sub>者、如<sub>二</sub>  
殺<sub>レ</sub>人之罪、則是方四十里、爲<sub>二</sub>一<sub>レ</sub>阱於國中、民以爲<sub>レ</sub>大、不<sub>レ</sub>亦宜<sub>二</sub>乎<sub>一</sub>』(梁惠王篇下)是に由て觀れば  
文王の都には方七十里の大園囿あり牧草や薪木を取る人も出入し雉や兔を獵る者も往來すとある

されは一般士民か自由に茲に遊樂するを得るは勿論なり斯の如く文王は民と園囿を共同に享用するか故に民は此大園囿すら猶以て小なりとす之に反して齊宣王の園囿は方四十里に過ぎされとも民にして其囿中の麋鹿を殺す者は殺人罪と同様に處罰す是れ方四十里の陷穽を園中に設けると同じ民の以て大と爲すは當然なりとの意なり孟子の此二章を對照すれば前章に謂ゆる靈囿は後章に謂ゆる方七十里の囿なり靈囿の内に靈臺靈沼の壯麗なるあり國王も茲に遊ひて樂み人民も亦茲に遊ひて樂む囿中に魚鼈禽獸薪草の利あり人民も亦時を以て漁獵採收を爲すことを許さる乃ち知る democracy は決して歐米の特産物に非ずして public luxury は獨り輓近國家の社會現象に止まらざることを嗚呼斯の如き君民偕樂の都こそ眞に花の都なれ斯の如き君民同利の地こそ眞に止まるべき邦畿なれ

## 第二節 權貴獨占の園囿及ひ其開放

夫れ上古の都會か天然形勝の地に據り漸く人工を加へ始には外敵に對する防禦を主たる目的と爲したるも後には文學美術宗教の中心となり交通貿易工業の要衝となり而して從來士民偕樂の地たりし都内の園囿又は廓外の山水は政治社會經濟事情の變遷に伴ひて往々專制君主又は權貴富豪の獨占に歸し復舊時の平民的庭園都市の面目を存せざるものあり支那戰國時代の諸王の園囿か其前

代に於ける如く復士民一般に開放せられずして王侯獨樂の處となり了れるは前掲孟子の諸章に徴して明かなり其後秦始皇か咸陽に阿房宮を營作し漢武帝か長安に柏梁臺を作り又首山宮建章宮等を營み隋煬帝か洛陽の顯仁宮を營み長安より江都に至るまで四十餘所の離宮を作り運河を開き御道を築きて柳を植えたる如きは古羅馬帝國の虐主か羅馬を修飾し近世歐洲の專制君主か其首府を營作したると同一の動機に出て、士民の便益を計るよりは寧ろ專制君主又は權門貴族の功名奢侈の慾を満たしたるものなりとす唐の杜牧か阿房宮賦に曰く『六王畢 四海一。蜀山兀 阿房出。覆 三百餘里 隔 離 天日。驪山北構而西折 直走 咸陽。二川溶溶 流入 宮牆。五步 一樓。十步 一閣。』と嗚呼何等の宏壯をや而して宮中に置く所ろ及ひ之を享樂する者は誰を曰く『妃嬪媵嬙。王子皇孫。辭 樓下 殿。輦來 於 秦。朝歌夜絃。爲 秦 宮 人。明星 燦 燦。開 粧 鏡 也。綠雲 擾 擾。梳 曉 鬢 也。涓流漲 膩。棄 脂 水 也。煙 斜 霧 橫。焚 椒 蘭 也。雷霆 乍 驚。宮車 過 也。轆轤 遠 聽。杳 不 知 其 所 之 也。一肌 一容。盡 態 極 妍。綆 立 遠 視。而 望 幸 焉。有 不 得 見者 二十六年。』と乃ち知る天下の財寶を聚め六國の美女を羅して只上一人の奢侈に供したるを而して其結果は何如曰く『嗟乎 一人之心。千萬人之心也。秦愛 紛 奢 人 亦 念 其 家。奈 何 取 之 盡 鎔 鉄。用 之 如 泥 沙。』と曰く『嗚呼滅 六 國 者 六 國 也。非 秦 也。族 秦 者 秦 也。非 天 下 一 也。嗟 夫 使 六 國 各 愛 其 人。則 足 拒 秦。秦 復 愛 六 國 之 人。則 遞 三 世 可 下 至 萬 世。而 爲 上 君。誰



得而族滅也。秦人不<sub>レ</sub>暇<sub>二</sub>自哀<sub>一</sub>而後人哀<sub>レ</sub>之。後人哀<sub>レ</sub>之。而不<sub>レ</sub>鑑<sub>レ</sub>之。亦使<sub>下</sub>後人而復哀<sub>レ</sub>後人上也。』と是に由て之を觀れば杜牧は豈獨り秦を用するか爲にのみ此賦を作りし者ならむや古を借りて以て今を諷し且又後を戒めんとす詩史の意を用ふるや深く、訓を垂るゝや遠しと謂ふべきなり唐の駱賓王の帝京篇は亦秦漢の故事を借りて當時王侯の驕奢輕薄を譏りたるものなり曰く『山河千里國。城闕九重門。不<sub>レ</sub>親<sub>二</sub>皇居壯<sub>一</sub>。安知<sub>二</sub>天子尊<sub>一</sub>。皇居帝里晴函谷。鶻野龍山侯甸服。五緯連<sub>レ</sub>影集<sub>二</sub>星躔<sub>一</sub>。八水分<sub>レ</sub>流橫<sub>二</sub>池軸<sub>一</sub>。秦塞重關一百一。漢家離宮三十六。桂殿陰岑<sub>トシテ</sub>對<sub>二</sub>玉樓<sub>一</sub>。椒房窈窕連<sub>二</sub>金屋<sub>一</sub>。』と見るへし宮闕の宏壯にして且華麗なりしを而し此處王侯驕奢遊蕩の狀を形容して曰く『平臺戚里帶<sub>二</sub>崇牖<sub>一</sub>。炊<sub>レ</sub>金饌<sub>レ</sub>玉待<sub>二</sub>鳴鐘<sub>一</sub>。小堂綺帳三千戶。大道青樓十二重。寶蓋雕鞍金絡馬。蘭牕繡柱玉盤龍。繡柱璇題粉壁映<sub>ト</sub>。鏘金鳴玉王侯盛<sub>ナリ</sub>。王侯貴人多<sub>二</sub>近臣<sub>一</sub>。朝遊<sub>二</sub>北里<sub>一</sub>暮南鄉。陸賈分<sub>レ</sub>金將<sub>二</sub>燕喜<sub>一</sub>。陳遵投<sub>レ</sub>轄尙留<sub>レ</sub>賓』と此駱賓王の詩は唐朝の爲に發すと雖他國他朝王侯の驕奢淫佚之に髣髴たるもの亦渺からず

唐の白樂天の隋堤柳の詩亦煬帝の事を借りて鑑戒の辭を爲せり曰く『隋堤柳。歲久年深盡衰朽。風飄飄兮雨蕭蕭。三株兩株汴河口。老枝病葉愁<sub>二</sub>殺人<sub>一</sub>。曾經大業年中春。大業年中煬天子。種柳成<sub>レ</sub>行夾<sub>二</sub>流水<sub>一</sub>。西自<sub>二</sub>黃河<sub>一</sub>東至<sub>二</sub>淮<sub>一</sub>。綠陰一千三百里。大業末年春暮月。柳色如<sub>レ</sub>烟絮如<sub>レ</sub>雪。南幸<sub>二</sub>江都<sub>一</sub>恣<sub>二</sub>佚遊<sub>一</sub>。應<sub>下</sub>將<sub>二</sub>此柳<sub>一</sub>繫<sub>二</sub>龍舟<sub>一</sub>。紫髯郎將護<sub>二</sub>錦纜<sub>一</sub>。青娥御史直<sub>二</sub>迷樓<sub>一</sub>。海內財力此時竭。

舟中歌笑何日休。上荒下困勢不<sub>レ</sub>久。宗社之危如<sub>二</sub>綴旒<sub>一</sub>。煬天子。自言福祚長無<sub>レ</sub>窮。豈知皇子封<sub>二</sub>鄒公<sub>一</sub>。龍舟未<sub>レ</sub>過彭城閣。義旗已入長安宮。蕭牆禍生人事變。晏駕不<sub>レ</sub>得歸秦中。土墳數尺何處葬。吳公臺下多<sub>二</sub>悲風<sub>一</sub>。二百年來汴河路。沙草和<sub>レ</sub>烟朝復暮。後王何以鑒<sub>二</sub>前王<sub>一</sub>。請看隋堤亡國樹。』

余往年再<sub>レ</sub>歐洲に遊<sub>レ</sub>ひ英佛獨塊以露等の諸都を訪<sub>レ</sub>ひ特に巴黎、ヴェルサイユ、維也納、羅馬の諸都に於て感慨甚<sub>レ</sub>た深かりき懷ふに此等の諸都の宮殿苑囿は往昔其國民すらも容易に入り又は近くを得<sub>レ</sub>さりし所なり而るに今や外國人にまでも開放せられて四民遊樂の仙境となり文學美術歷史の研鑽者に必須の寶庫となり又は信教敬祖愛國の標的となる是れ即ち少數者の奢侈か變して社會公衆の享樂に化したるものにして或は之を公共的奢侈 (public luxury) と稱し或は奢侈の社會化 (socialization of luxury) と名くる者ありと雖も余思ふに是れ既に奢侈の性質を失ひたるものにして奢侈の一種たるか如き名稱を附するは妥當に非すとす何となれば奢侈物とは比較的不要なる財貨にして之か獲得に比較的多大の勞費を要し従つて社會の少數者のみか享受し得るものものなればなり然らば則ちヴァチカンやヴェルサイユやルーヴル等の諸宮殿及び其苑囿は往時は羅馬法皇や佛國王の豪奢を誇りし所なりしも今や世界文化の教育開發に向て必要とする所の貴重なる資料となりたるものなりとす

翻て我國に就て見るに亦彼に似たるものあり、曾て足利豊臣徳川氏等か政權を握りたりし時に於て彼等及び諸大名か各自獨占したりし城郭宮殿苑囿は王政維新後大抵國家又は地方團體の所管に歸し而して其多くは公衆に開放せられて或は史蹟の研究に資し或は遊樂の場所となり其他種々公益の目的に供せられたるもの一々枚擧するに遑あらず足利義滿義政二公か奢侈風流の遺蹟たる金銀閣寺は今や田夫野老にすら茶をすゝめ菓を饗するの處となりぬ徳川幕府か門關を嚴重にして一々行人を誰何したりし江戸の城内は今や萬人自由交通の街となりぬ公園あり以て徜徉すべく樂堂劇場あり以て觀聽すへきなり今夫れ一介の平民か二重橋畔に立ち宮城に咫尺して拜禮し得たる時徳川時代の昔を思ひ比へたらむには彼の感想は果して如何そや更に例を舊藩の城市に求めんか現今我國三公園と稱せらるゝ水戸の常磐公園、金澤の兼六公園、岡山の後樂園の如きは徳川景山公前田金龍公池田曹源公等の營作したる處而して此等を以て舊藩公獨樂の處と評し去るは固より當らずと雖も現今に於て一般民衆に開放せられたるか爲に其功德の及ぶ所一層廣大となりたる事は決して之を否む能はざるへし蓋し此等の諸園は昔時密に藩侯の遊樂の地たりしのみならず又國中の人をして君侯と其樂を偕にせしめたる所たりしものありしなり其證には常磐公園の營作者たる景山公(齊昭)は此を名けて偕樂園と稱し自ら文を撰して曰く『余嘗就吾藩、跋涉山川、周視原野、直城西、有開豁之地、西望筑峰、東臨仙湖、凡城南之勝景、皆集一瞬之間、遠巒遙峰、

尺寸千里、攢翠壘、白、四瞻如一、而山以發育動植、水以馴擾飛潛、洵可謂知仁一趣之樂郊也、於是藝梅樹數千株、以表魁春之地、又作三亭、曰好文、曰一遊、非啻供他日芟憩之所、蓋亦欲使國中之人有優遊存養焉、國中之人、苟體吾心、夙夜匪懈、既能修其德、又能勤其業、時有餘暇也、乃親戚相携、朋友相伴、悠然造蓬子二亭之間、或唱酬詩歌、或弄擘管絃、或展紙揮毫、或座石點茶、或傾瓢樽於花前、或投竹竿於湖上、唯從意所適、而弛張已得其宜矣、是余與衆同樂之意也、因命之曰偕樂園、天保十年、歲次己亥、夏五月建、景山撰、並書、及題額」と夫れ景山公は近代の名君なり其園囿を營むに方りて孟子の偕樂主義を執り文王の靈臺靈沼に則たりたるは此文に依りて之を知るを得へし其他の諸侯に至りては或は景山公の如くならざるもの多からむ然れども我國の史乘に秦皇なく隋煬なくルキ十四世なく革命の變亂なき所以のものは蓋し君臣偕樂の主義か上古より帝都を中心として各都會各地方に波及し世に變遷あり時に隆替ありと雖も此主義の根柢深くして到底抜くこと能はざるものあるに職由せずはあらず

### 第三節 輓近都會の俗惡化及び庭園都市建設の必要

#### 市建設の必要

夫れ封建制度の破壊、君主專制の廢絶及び立憲政治の確立か世界各國の都會の面目を一新したるは固より怪むに足らず而して從來君主又は權貴の奢侈の目的物たりし宮殿珍寶は國有の美術館又は博物館及び其備品として一般民衆に開放せられ又彼等の苑囿は公園となり又は學校圖書館醫院等公益的營造物の所在地となりたるの例は枚擧に遑あらず夫の米國の如き歴史的名所舊蹟の始より多く存せざる新開の都會に於て富豪か巨資を醸出して公共的營造物を興し又は其私苑を開放する者往々これあり是等の事實は誠に喜ふべきものに屬すと雖も之と同時に輓近文明諸國の都會は更に大に悲しむべき反對の事實を現はしつゝあり何そや曰く一言以て之を蔽はゞ都會の俗惡化する事是なり

夫れ立憲政治の確立は勞働及び企業の自由を認め各人は自己の欲する所の職業を選びて之に就き自己の往かんと欲する場所に移住するを得又各人は其資本を自己の最も有利と信する事業及び方法に投するを得而して此個人自由主義は私有財産制度と互に相依り相助けて經濟上に於ては謂ゆる産業革命を成就せしめたり然り而して都會は常に此産業革命の中心となり新に發明せられたる精巧なる機械は此處に於て運轉せられ大規模の商工業は此處に於て遂行せられたり是に於てか諸文明國の都會は年々驚く可き人口の集中を來し之に伴ふて巨大なる富の集積あり土地價格の著るしき騰貴あり而して人口の多數は勞働に衣食する無資産階級 (proletariats) に屬し且其數は農村

を去りて都會に來る者に由りて年々増加しつゝあり加之最近大規模の商工業の發達は交通運輸の進歩と共に漸く小規模の商工業を抑壓し之と共に中央政府并に都會の爲政者か久しく施行せる誤まれる反社會政策的租稅制度は漸く中産階級の存立を危くしたり是に於て都會の人口は益々増加すれども貧富の懸隔は益々甚しく小地主は其土地を賣り小家主は又其家屋に離れて土地の兼併は愈々行はれ借家人の増加は益々劇甚なり

是に於て都會目貫の處には大廈高樓臺を并べて表面に其偉觀を誇示すれども裏面側面は多くは尺寸の空地をも存せず而して都會の場末には汚穢狹隘なる陋巷貧窟其數を増し而かも其住民は家賃の日に高く生計の月に苦しきを嘆ちつゝあり而して工業の盛なる都會に在りては煤烟天を蔽ふて日光爲に暗く汚氣地に充ちて呼吸も苦しきを所と化し偶ま街側に並木を植うるも電線の蜘蛛の網其枝梢を抑えて生育を妨げ曾て都人士か釣を垂れたる楊柳の岸は百貨山積せる荷揚場と化し遊舫を浮へたる清流の河は汚濁なる溝渠に變し前時代王侯の苑囿にして公園となりたる所も亦同一の運命を免かれず常緑の樹は常に緑なるを得ずして煤烟に焦れ花咲く春に遇ひ乍ら花咲かぬ老木の櫻の終に薪となるもの比々として皆是なり

試みに我國の三都に就きて維新以來如何に變遷したるかを見よ余か茲に述ふる所は總て事實の眞相にして決して舞文虛構に非ざるを知らむ嗚呼東京の上野及び墨堤の櫻樹は今や半は既に枯れん

とし而して御殿山の紅葉は唯名のみとなりぬ飛鳥山の幽境も亦きのふに變る俗地と化し日暮里の里も今は只夜を徹して車聲の囂々たるを聞くのみ平安の舊都も亦獨り平安なるを得ず舊て樵街に道行く人の鈴を止めたる翠柳の並木は何時の間にか目障りなる電軌電柱と代り高瀬川に面白く端歌うたひつゝ曳く船の船子の影は消えて川筋は唯糞泥の晝夜を息めすして放流しつゝあるを見るのみ頼山陽か『向人休 問南禪寺、一帶青松路不迷』と咏しけん其青松の路は今果して何處に在りや京都の生命たる名所舊蹟神社佛閣は漸く俗界塵域の包範を受けて往々其清淨なる境內を侵掠せらるゝあり余因て近頃左の四首の詩を得たり

京洛卽事

欲訪南禪寺。還疑笑語譚。洛東幽勝地。半屬富豪家。  
元是神靈境。今誇不夜城。草塵洲渚滿。誰道鴨川清。  
鐘磬雜歌吹。寺接狹斜衢。休問僧耶俗。佛心差別無。  
古今風俗改。依舊有鶯花。不見提瓢杖。唯逢載妓車。

大阪市に至りては其俗惡化は實に言語に絶するものあり古來美はしき水の都とたへられ古歌に『みやこび都こびけり』(第一節既掲)とよまれたる難波は今や煤烟塵埃の修羅場となり了りぬ

從來我國の都會に於ては中産者か多數を占め自己所有の土地に家を建て、居住し敷地の一部に小

庭園を設けて業餘の慰樂に供する風習は一般に行はれたりしなり而して中等の借家の如きも亦庭園を帯ひたるもの多かりしなり然るに人口の集中土地の兼併借家の劇増と共に此等の私的小樂園は漸く其跡を絶ち唯少數の富豪か都會最良の位置に宏壯偉麗なる邸園を獨占する者あるのみ嗚呼斯の如くして古への花の都は個人自由主義の嵐に散り畢んぬ往時の偕樂的庭園都會は私有財産制度の馬蹄に蹂躪されぬ而して更に寒心に堪へざるものは此嵐此馬蹄は啻に大都會の區域内を荒らすに止まらずして其近郊に及び又小都會に及び田村にも及びて其猛威を逞ふする事是なりとす

夫れ輓近の都會に於ける異常なる人口の集中及び巨富の集積は土地の價格を甚たしく騰貴せしめたるは已に述べたる如し而して此土地の騰貴は都會をして立體的に發達せしめ泰西特に米國の都市に於ては數十階の摩天樓を現出すること日に月に盛にして屋上屋を架して家は愈高く頭上蹠を載きて人は益々密集す而して市街交通機關の發達及び其郊外に向ての延長は更に都會を平面的に發達せしむるを致し幾分か都會中部の熱鬧を緩和するに庶幾しと雖も而かも郊外の土地は亦私有地なるか故に交通機關の延長は地主をして其土地を最も營利的に利用せしむるの好機會を與へ又は他の投機者流をして其土地の騰貴を見越して逸早く買收せしむるを致し斯の如くにして郊外の美なる田園は先づ草原に化し遂に殺風景なる貸長屋の列を見るに至る人或は之を田園の都會化なりと謂ひて却て満足の意を表する者ありと雖も余は之を俗惡なる都會の延長として慨嘆せざるを



得ざるなり

斯の如き都會及び近郊の俗惡化は輒近文明諸國に共通の事實にして其經濟上風紀上衛生上教育上の弊害は得て測るべからざるものあり是に於て庭園都市及び庭園郊外 (Garden city and garden suburb) の問題は識者の漸く提唱する所となり英國に於ては千八百九十八年に Ebenezer Howard 氏 "The Garden City of To-Morrow" と名くる書を著はして之か先鞭を著け此理想の實行を目的とする共助的會社 (co-operative corporation) は千九百三年に組織せられ倫敦の西北三十四哩汽車程九十分時の距離に在る Letchworth は候補地に選定せられ四千エーカーの土地は一エーカーに付き二百弗の價格を以て買収せられて茲に理想的庭園都市の乳兒は其呱呱の聲を擧げたり抑も此共助的會社は公益を主とする團體にして資本に對する利益配當を百分五に限定しそれ以上の利益は總て住民の公益に供せらるゝか故に此會社は他の營利的土地會社に常に見るか如き粗惡なる長家を建て居住者を密集せしめ而して益々賃貸料を増加するか如きことなく各家屋を繞らすに庭園を以てし一エーカーの地積に對する家屋の數の最大限を十二とし市内に學校、俱樂部、遊園を設くるのみならず市の周圍に家禽菓實野菜の園藝場を設けて以て市民に新鮮低廉なる滋養食品を供給す又會社か始め街路を設けたる時瓦斯水道電力の供給に向ての施設を爲して自から之を管理し出來得る丈經費を節して以て料金を低廉にす同市は啻に理想的住宅地たるのみならず工業も亦其

土地か低廉なるか爲に招致せられ而して會社の規程に従へば工場は鐵道線路に沿ふて建つるを要し且住宅區と或距離を保つを要す又工場は一階建とし日當り及び空氣の流通を善くして以て職工の執務を快適にす斯くして同市は久しからずして繁榮なる工業都市となれり即ち同市建設の初年には人口僅かに四百人なりしに四年の後には七千人を算するに至れりといふ此成功せる庭園都市の實驗は直ちに各地に模範を興へて新なる庭園都市及び古都市の新なる庭園郊外の建設せらるゝもの年々増加したり例へば Liverpool 市に近き Port Sunlight や Birmingham 市に近き Bournville の如き庭園都市及び Manchester, Liverpool, Bristol, Hull 諸市の庭園郊外の如きは是なり

是等の詳細は Frederic C. Howe が千九百十二年七月刊行 Scribner's Magazine 誌に掲げたる "The Garden Cities of England" のなる論文及び同氏か千九百十四年の著書 "The Modern City And its Problems" の中に詳なり英國以外の庭園都市に就ても前掲雜誌及書籍に記述せられ其他諸外國の都市に關する著作は近年頗る其數を増加したりと雖是等を涉獵して歐米の各庭園都市を比較論評するは本論文の目的及び範圍に非す余は我國の古を致へ今を顧みて更に將來を推すに我國の都會は曾て花の都なりしを今は個人自由主義の風に吹かれ私有財産制の雨に打たれ工業革命の烟に壓されて塵埃淤泥の巷となれり之を今日の儘に放任せんか我國都會は終に腐敗醜惡の修羅場と化するならむ是れ余か本論に於て歐洲庭園都市の例を引き我國花の都の舊を偲ひつゝ我國の地理民情

風俗に恰適なる借樂的庭園都市及び庭園郊外の建設の急務なるを絶叫せんと欲する所以なり  
余曾て大阪の近郊濱寺公園に遊ふ國內に一碑あり大久保甲東氏の句を刻す曰く

音にさく高師の濱のはま松も世の仇浪はのかれさりけり

嗚呼何等の警句そや甲東氏明治の初年に於て數十年後に於ける都會及び郊外の俗惡化を豫見する  
こと斯の如し此句豈獨り高師の濱の松のみに就て言ふものならむや (完結)